

コガンビに似た花序をもつこと、シマザクラガンビのみ先端尾状の葉を必ず（特に枝端の葉で）もつが他は鋭頭でも尾状とはならないこと、オオシマガンビはコガンビ状の螺旋葉序だが他の二つは外観上二列生的になること等の性質があげられる。

終りに御指導を仰いだ猪熊教授、倉田助教授、又腊葉・現地調査・文献等で種々御配慮にあづかつた東大理学部・科学博物館の両腊葉庫、館脇博士、前原勘次郎氏、原博士、天野鉄夫氏（琉球）、守屋忠之氏（秩父）の諸方に心から御礼申し上げる。

〇マツバラシテ 秩父に産す（永野 巖） Iwao NAGANO: *Psilotum nudum* Beauv. collected at Kuroya in Chichibu.

関東地方におけるマツバラシテの産地は非常に少く正宗敬博士によれば（植研 27 巻 3 号）静岡県下各地、栃木県塩谷郡船生村佐貴、千葉県鑑山が知られているのみである。私は 1955 年 7 月及び 8 月に本種を埼玉県秩父市黒谷瑞岩寺の硅質礫岩よりなる岩壁（標高約 220 m）から採集したので新産地として報告する。この岩壁は高さ約 40 m 巾約 150 m で、秩父地方としては比較的石灰岩壁に良く着生するキンモウワラビ、クモノスシダ、ツルデンタ、ヒメイトラノオなどのシダ類や *Anomodon giraldii*, *A. decurrens*, *Homalothecium tokiodense*, *H. laevisetum*, *Hyophila propagulifera*, *Molendia sendtneriana* などの蘚類がみられる。またこの硅質礫岩の構成岩塊の大部分は砂状の石英粒であり（他に礫質の角岩、粘板岩を若干含む）化石や方解石の破片は含まれていないが石灰質の膠結物質を多量に含有しているものと思われる。即ち岩壁の表層には再結晶した炭酸カルシウムが厚く沈積し、70-95% の CaCO_3 を検出することが出来た。恐らく岩壁上面に降つた雨水が、透過水性をもつこの岩壁内部（全部硅質礫岩からできている）の膠結物質を溶解し、蒸発に際して岩壁の表層に沈積させたものと考えられる。このことは特に風化、分解の促進される陽向地の絶壁表層において顕著であり、樹陰においては少ない傾向がある。マツバラシテはこのような非常に石灰質な良く陽の当る岩壁の割目に沿つて下垂していた。（秩父自然科学博物館）

Errata for Vol. 30 (1955) No. 2

page	line	for	read
33	11	will	will be
"	12	hereaftear	hereafter
35	27	Adj. 1.	Adj.
36	31-32	to to	to
37	6	2: 180 (1911)	17: 45 (1928)
"	28	Is.	Isl.